

第3－（小）分科会

分科会テーマ	特別支援学級における指導		
話題提供者	日吉 わかな（伊豆の国市立葦山小学校）	司会者	山崎 善雄（伊豆の国市立長岡南小学校）
助言者	岩本 浩輔（函南町立西小学校）	記録者	武田 朋子（函南町立函南中学校）

1 話題提供者より

発表テーマ「特別支援学級における個に応じた学びの場や環境を整えた授業づくり」

（1）発表内容

①授業のパターン化

パターン化することで授業の内容や時間を可視化し、児童が見通しをもって取り組めるようにする。

②ヘルプシートを使った個の特性理解

静岡県総合教育センターにある、ヘルプシート・リサーチシート・プランシートを使って個の特性を理解し、合った支援を計画していく。

③障がいの状況や発達段階への配慮

席位置や掲示物など、授業に集中できるように個の特性に合った配置にする。
読みが苦手な児童に対して、50音表を手元に置き、困ったときにすぐ見られるようにした。また、音読用スリットを作成し、教室に置くことでいつでも自分が好きなタイミングで使えるようにする。

（2）成果と課題

①成果

- ・読み書きが苦手な生徒が、妹に読み聞かせを行うために、初めて自分で読める本を図書室で借りた。
- ・教員や支援員と一緒に平仮名の絵本を読むことで、本人の自信につながった。
- ・50音表を見ながら音を確認していた生徒が、音読用スリットを使って練習することで、50音表がなくても読めるようになった。
- ・社会科見学でメモを取ったり、展示資料の説明を教員に質問して書こうとしたり音と文字が一致してきた。
- ・読み方に困った時には、友達に聞き、正しく読むことができた。

②課題

- ・読むことについては、文字と音が一致してきたり、言葉のまとまりが分かってきたりと改善はあるが、引き続き支援が必要な状況である。
- ・活動や方法の良し悪し、継続や変更の見極めが難しく、個に合った支援が適切に行えているかの判断が難しい。

2 協議内容

会場がホールで、席の配置的に協議が難しかったため、助言者の話を受けて、近くの教員で情報共有や、他地区の特別支援学級・通級・特別支援コーディネーターの状況などについて話し合いを行った。

そこで出た意見は、アンケートに記入をお願いした。

3 助言者より

静岡県から出ているワークシートを活用した研究で、他の先生方も実践がしやすいものだった。

今の現場では、通常級→特別支援学級→通常級の流れで担任をもつ教員が多く、特に若手が多い。改めて特別支援に携わる先生を一人にしないこと、また、特別支援の面白さを伝えていくことが大切。

県内でも、通級教室の配置にかなり差が大きく、十分な支援が受けられていない児童生徒もいる可能性がある。管理職の特別支援教育への関心が高いので、通級教室の新設、増設を現場から投げかけていくことが重要。

第4-(中)分科会

分科会テーマ	特別支援学級における指導		
話題提供者	若林 美歩 (下田市立下田中学校)	司会者	松本 紀美子 (西伊豆町立仁科小学校)
助言者	滝井 隆 (伊豆の国特別支援学校伊豆下田分校)	記録者	杉本 鶴希 (東伊豆町立熱川小学校)

1 話題提供者より

【発表テーマ】

授業や地域との関わりを通じたコミュニケーションの力・人と関わる力の育成

(1) 発表内容

①学校について

特別支援学級(知的1、自閉情緒1) 通級指導教室(発達障害1)

②生徒の実態

生徒A→○体を動かすこと・車 △書くこと・伝えること・人と関わること
生徒B→○人と関わること △自分の意見を伝えること・気持ちのコントロール

③授業実践 理科「風とゴムのはたらき」

指導の工夫点→視覚的に提示・生徒が好きな題材・車を自由に走らせる時間の確保
成果→見通しがもてる・意欲的に取り組む・生徒同士の関わりが増える
課題→失敗した時の気持ちのコントロール・大勢の前で話すことへの抵抗感

④授業実践 道徳「『怒り』と上手につきあおう」

成果→視覚的に自分の怒りを見ることで、気持ちへの理解が深まったり、要求の仕方の指導につなげたりすることができた。

⑤授業実践 生活単元「いろいろな生き物を観察しよう」

指導の工夫点→自然散策後に見つけた生物をiPadにまとめ、周りに伝える。
成果→少しずつ地域の方との会話が増えた。また、相手を意識したスライドのまとめができるようになった。

⑥まとめ

生徒の興味を引く題材、周囲の人と関わる場の設定、自分の思いを伝えるための支援⇒コミュニケーションの力・人と関わる力の育成につなげることができる。

2 協議内容

Q. 普段の生徒への顔出しに対し、どの程度の配慮を行っているのか。

A. 全校で保護者への許可書を出した承を得ている。特別支援学級では、保護者の意向が強いため面談等でも確認している。

Q. 生徒A・Bの反応がとても良い。関係作りをする上で大切にしていることは何か。

A. 生徒たちの反応を見ながらいろいろな実践を試すことで反応が良くなっていった。

Q. 道徳で「アンガーマネジメント」を取り扱った理由は？自立活動は行っているのか。

A. 自立活動は行っているが、自分や相手の気持ちに重点を置いて授業を行いたかったため、今回の実践はあえて道徳で取り上げていた。

Q. タコおこメーターのその後はどうなったのか。

A. 今も教室の横に貼ってある。生徒の方から、その絵を見て自分の怒りについての発言が見られるため、今後も貼っておきたい。

・「風とゴムのはたらき」の実践では、視覚的な指示を行ったり、生徒の興味関心に寄り添った教材提示をしたりするなど勉強になった。

・下田中とはサッカーで関りがある。地域の方とのつながりが深い学校だと感じていた。子供の様子の写真から、親子の会話が増えるため、お便りでは文字よりも写真を多く使用している。また、子供が文字を書いている時の手元の写真を何枚も撮って、そこから分析するなどして活用している。

3 助言者より

【賀茂地区の現状】

- ・一校当たりの生徒数が少ない。
- ・一人学級、少人数学級の開設が多い。

【教育的ニーズをどうとらえるか】

・教育的ニーズとは、子供一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を把握して、特別な指導内容や教育上の合理的配慮を含む支援の内容が必要とされるか検討し整理されるもの。

・教育的ニーズの整理の観点

⇒①障害の状態 ②特別な指導内容の有無 ③教育上の合理的配慮を含む必要な支援

【指導や支援の工夫】

・自立活動の大切さ

⇒子ども一人一人の教育的ニーズに応じて行う。

・指導支援の工夫

⇒ユニバーサルデザインの考え方で行う。

(教室環境の整備、授業の構造化、板書・教材の工夫、安心できる学びの場の設定、多様な学びの場の設定など)

⇒分かり方の特性を生かした指導

(継次処理優位タイプ、同時処理優位タイプ、聴覚優位、言語視覚優位、象形視覚優位などを見極める。)

【まとめ】

・教育的ニーズを整理することで、子供の今の生活を豊かにすることにつながる。

・授業づくりの段階から生徒の教育的ニーズを見つめ、成長や課題を確かめながら指導を工夫してきた授業者の姿勢が素晴らしい。

【講演会】



【第1分科会】



【第2分科会】



【第3分科会】



【第4分科会】



静教研 特別支援教育研究部 夏季研究大会 アンケートの集約結果

1. アンケートの実施方法

GoogleForms にてアンケートを作成し、大会レジュメにアンケート回答用の QR コードを載せ、参加者への回答を求めた。

2. アンケート項目

- (1) 所属地域：13 地区から選択回答（必須）
- (2) 参加分科会：第 1～第 4 分科会から選択回答（必須）
- (3) 開催方法について：自由記述回答（任意）
- (4) 講演会の内容について：（必須）

「講演会の内容はどうでしたか」の問いに対して「参考にならなかった～とても参考になった」を 5 段階で回答（必須）

- (5) 講演会の感想、意見について：自由記述回答（任意）
- (6) 参加した分科会の内容について：（必須）

「参加した分科会の内容はどうでしたか」の問いに対して「参考にならなかった～とても参考になった」を 5 段階で回答（必須）

- (7) 参加した分科会の感想、意見について：自由記述回答（任意）
- (8) 大会全体を通して感想、意見：自由記述回答（任意）

3. アンケート結果

参加者 333 名中 227 名から回答を得ることができた。

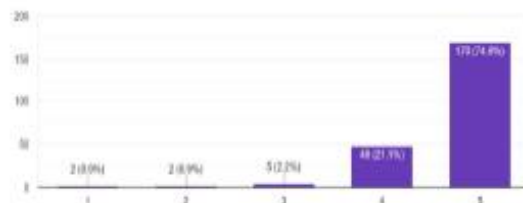
開催方法については、概ね集合開催でよいという意見であったが、リモートやハイブリットでの開催も検討してほしいという要望も多くあった。

講演会の内容については、参加者のほとんどが「とても参考になった」と回答している。感想についても、たくさんの回答をいただいた。

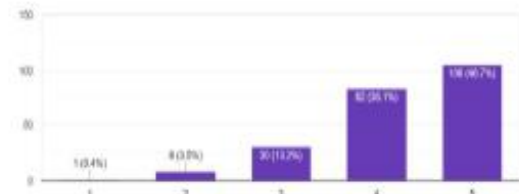
分科会についても、「参考になった」という回答が多く、たくさんの意見をいただきそれぞれの分科会で活発な協議が行われたことが伺われた。顔を合わせて、他地域や他校種の現状を知り交流できたことは大変有意義であった。

大会を通しての感想や意見では、駅から近い会場でコンパクトに行われたことには大きな評価を得られた。

4 講演会の内容はどうでしたか、
227 名回答



6 参加した分科会の内容はどうでしたか、
227 名回答



【考察】

今年度は講演会・分科会ともに参集方式で行った。双方向のやり取りのしやすさ、話の聞きやすさなどメリットがある一方で、旅費や日時の関係で参加できない教員もいた。

講演では、同じ診断がついていても当事者の視点で個別に考えていく必要があること、社会が急激に変化していく中では特別支援教育の考え方もアップデートしていく必要があることに気付くことができた。多くの教員が自分の実践の裏打ち、実践の改善点、今後生かしたい事などを得ることができた。今回の講演は、リモートなどで多くの先生に聴いてもらいたかったという意見も多かった。また、オンラインでは日時に都合がつく人だけに視聴が限られるが、オンデマンド方式なら都合のよい時に視聴することができ、多くの人が視聴できるという意見があった。今後検討していくとよい。

分科会では、発表者の実践だけでなく他地区の教員との交流もよかった。参考となる実践を聞くことは、経験年数によらず今後の実践の改善や意欲につながった。学校によっては特別支援教育について相談できる相手がおらず、今回が貴重な機会となった教員もいた。ただ、ホールでは交流しにくく、同じ地区の教員で固まって座っていることが多いため、より広い交流をするための方法を検討するとよい。

開催方式は参集・リモートどちらにも肯定的な意見があった。静教研は静岡県全域の教員が参加できる研修会であり、できるだけ多くの教員の学びの場、交流の場であることが重要である。しかし、静岡県は東西に長く、開催地と勤務地の場所によっては時間や旅費の負担が大きい点を考慮することが必要だ。参集・リモート双方のメリットを生かし、選択できるようにすることで、より多くの教員の学びの場にできる可能性がある。しかし、事務局となった地区の教員だけでこうした環境を整え問題なく開催するのは難しい。業者の協力が必要だが、限られた予算の中で開催しているため、それも難しいかもしれない。コロナ禍によって、ここ数年開催の仕方が変わってきており、選択肢も増えた。よりよい大会環境を整え、事務局に大きな負担がかからないようにするには、外部の力も借りつつ、引継ぎを確実にを行い、手順や方法を蓄積していくとよい。